

第5章 評価基準の定め方

評価基準について考察するには、まず「評価」そのものの意味について考え直す必要がある。寺西（1977）は⁽¹⁾評価と訳される英語と関連づけてこの問題を検討している。その例を表5.1に示す。寺西を参考にすると、音質評価の「評価」はratingまたはevaluationに相当し、人間の判断応答を基本データとし、そのデータに基づいて感覚、嗜好、態度などの尺度を構成し、それらの心理状態を尺度上の値として表現することを意味する術語と言えよう。

	英 語	本 来 の 語 義	よく用いられる訳語
1	appraisal	資産などの値打を見積り、値段をつけること。またはその価格。	資産鑑定、査定、評価、評価額
2	appreciation	真価を正しく認めること。相手の労力や好意などを正當に評価すること。	鑑賞、玩味、認識、評価、感謝
3	assessment	課税のため、財産、収入などの金額を定めたり、料金や税率を定めたりすること。またはその金額や税率。	査定、査定額、評価、評価額、課税、賦課、賦課額、割付金
4	estimation	値段や性能を大まかに見積ること。	概算見積、予算、見積高、評価
5	evaluation	物事を価値尺度上に位置づけること。数値を求めること。	評価
6	judgment	法廷などの裁きの後で下された正式な決定、または見解。識別し、比較して作られた見解。判断する能力。	判決、判断、評価、批判力、
7	rating	地位、身分、税金、給料、成績などを等級に分けたり、等級の順に並べたり、その等級の中へ位置づけすること。格付けすること。または格付けされた等級。	格付け、等級、評点、評定、評価
8	valuation	物事の価値判断をして値段をつけること。値ぶみすること。	評価、値ぶみ

表5.1 「評価」と訳される単語例と本来の語義（寺西1977より）

寺西はアセスメントと評価を区別し、前者を「常に主眼となる政策や事業が、念頭であり、それを遂行した場合の諸効果を総合的に検討することにより、その事業がどの程度まで費用をかけるに値するかを査定」することとし、騒音対策を例にとると、対策行為の費用と効果の観点から騒音の程度を査定することを、騒音評価ではなく騒音の査定と区別すべきことが望ましいと述べている。

環境問題の場合アセスメントは一般に「環境影響評価」とよばれ、大規模事業が計画された場合、たとえそれを実施しても、環境基準に照らしてみても環境に著しい悪影響を及ぼさないか否か、調査することを指すケースが多い。基準がない場合には過去の例から推定したり、あるいは基準を決めるための調査や実験が行われることもある。

さて音質評価の場合の評価には、先の rating または evaluation の意味が強いが、評価基準の場合の評価にはアセスメント的側面もふくまれよう。即ちある製品の音質がある基準（例、社内基準）とくらべて合格か否か、製品のコストに比して、十分な音質（品質）に達しているか否か、他社製品と比べて負けないレベルにあるか否か、など種々の価値的基準と比較して評価することを意味すると思われるからである。

この場合、基準として環境基準や J I S のように公示されたものがあるわけではなく、基準そのものを何らかの根拠に従って作らなければならない。例えば、多数のユーザを被験者として音の嗜好や音色の弁別に関する実験を行い基準を提案する方法もあろう。

またエキスパート・システムにみられるように、エキスパートの判断を基準とし、客観的測定からエキスパートの判断を推定する方向もあろう。いずれの方向を目指すかは判断の問題であるが、楽器やオーディオ製品のように趣味的、嗜好的性向の強い分野では、多数の被験者の判断を平均してみても平凡な結果しか得られないおそれがある。エキスパートの判断を基準とし、それを基準としても誤りではない、とのチェックに多数被験者による実験データを用いるのがよいのではなかろうか。

文献

- (1) 寺西立年：騒音・振動の評価に関する問題提起、文部省科学研究費「環境科学」特別研究シンポジウム、「環境科学」特別研究騒音・振動委員会、1977.